



辻 信一

山崎 亮  
studio-L代表。東京大学大学院修了。博士(工学)。社会福祉士。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。主な著書に『コミュニティデザイン』(学芸出版社:不動産協会賞受賞)、『まちの幸福論』(NHK出版)など。

……二つの流れ

辻 ……先日、滋賀で三ヶ所、善了寺をあわせると四ヶ所、(兄である)大岩剛一が生前、設計したものを山崎さんに見ていただいて、また彼の仕事に関わってきた人たちの話も聞いていただきました。剛一の仕事ぶりや人柄についての話も出てきましたね。

生前、剛一は山崎さんのお仕事にも注目していて、とても会いたがっていた。残念ながら、直接会っていただく機会はもてなかったわけですが。

山崎…ぼくもお会いしたかったです。  
辻 ……まず、大岩剛一の仕事について、全体的な印象について聞かせていただけますか。

山崎…大岩さんの仕事は、それぞれが必然性でつながっているなあという印象です。お寺もカフェも人々に使ってもらう建物です。住宅は建主が使う建物ですが、近隣の人や友人も訪れたほうが楽しくなる建物でもあります。特に超長寿社会になると、家族以外の人たちも出入りする住宅のほうが楽しい。交流が

住む人を健康にする。

そう考えると、お寺もカフェも住宅も完成したいろいろな人が訪れる場所になってほしいわけですが、ところが一般的な設計者は施主の話を聞いて、自分の作品のように建物をデザインし、施工のプロに任せて完成させてしまう。そうすると、建物が完成した後、施主は改めて「みなさん、どうぞ訪れてください」と呼びかけなければならない。しかし、大岩さんの作り方は違う。建物を作るときから友人や近隣の人たちに手伝ってもらう。そうすると、手伝った人たちは完成後に建物を訪れやすくなる。友人を連れてきて「この壁は私が塗ったのよ」などと語りたくなる。施主に「トイレはどこですか？」などと聞かなくても、すでに分かっているわけです。

つまり、大岩さんは建物が出来上がった後のことを想像しながら、人が集まる空間を設計に盛り込むだけでなく、施工のプロだけでなくさまざまな人と建物をつくる。日本の建築家のなかで、数は少ないですが同様の方法で建物をつくる人はいます。ただ